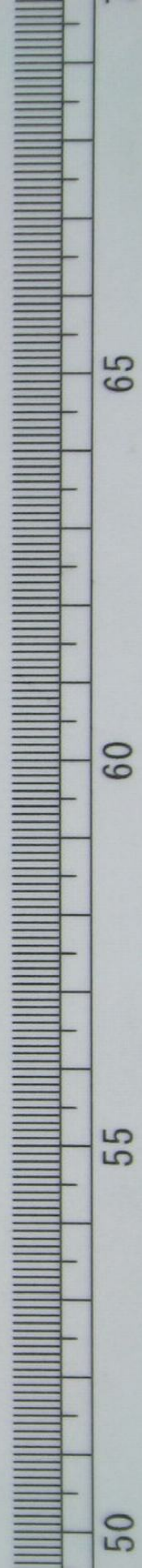


源華史略

六編

下



50

55

60

65

A 414
10

繪本難波戰記三編卷之二

東京

和田定節編集

○くろいね榎井のせんとう戰鬥せん塙團せん右せん工門せん岡部せん大學せん戰死のせん支

さてせんわせんくせんんせんひせんでせんとせんてせんりせん
却説將軍秀忠公ハ四月九日江戸城と進發あり越せん

後少將忠輝せん黒田せん筑前せん守長せん政加せん藤左せん馬助せん嘉明せんら

軍せん不せん従せんはんせんとせんとせん請せんひせんとせんもせんふせん江戸せんとせん發せんすせん同せん廿せん一せん日

將軍せん伏見せんふせん著せんせせんられせん翌せん廿せん二せん日せん二せん條せんのせん城せんふせん至せんり

良花

48-7645

前將軍ふ對顔ありたり前將軍ハ廿八日と以て
師と出すべしと成を將軍ハ是を止め総軍い
まご全く集まらざれば今少く軍隊の至る候
疾さんとと請ひるふ前將軍曰ふいやとよ此役
ハ野戦ふ決すと覺也野戦ハ兵の多きと用ひざ
るぬれを乃公見兵と以て先づ往らん汝ハ大軍
と合して之ふ継ぐべしと將軍答へて言ふ兒此
處ふ在り大人としく前軍としくめを世の中の

人之と何と申さん前將軍曰ふ吾老年ふ及び
復と軍事ふ遭ふべきとるふ必ず衆ふ先どつて
一樂戦せん和本多佐渡守正信側ふ侍りしが進
と出で曰ふ臣聞く軍の先後ハ地の遠きと
近きとふ在りと太公ハ京都ふ在り郎君ハ伏
見ふ在す其順次已ふ定りれり太公の命其ど
道理るしと前將軍之と聞き前軍ふ進むと致
止め藤堂高虎と召びて城と攻るの方畧と諮

へれとり高虎對へて曰ふ遠きふ利ありて近きふ
 利あらず輕兵と以て戦ひと挑と彼より遠く軍と
 出すと疾つて之と逆え撃つて破らる彼ら敗血
 の餘り復と城と守るの志一るるべトと前將軍
 掌と撫で曰ふ子タ言我口より出づるガ如
 と大いふ賞譽られ遂ふ諸軍の嚮ふ所と定む
 石川主殿頭忠総ふ高槻の城と守らせ池田武藏
 守利隆池田宮内大輔忠雄兩人ふ尼ヶ崎の城を

守らす其他山陽道山陰道の將士へ神崎より進
 淺野但馬守長晟蜂須賀阿波守至鎮以下南
 海道の將士の和泉より進む而して大和美濃の
 諸軍勢へ大和口より總軍ふ先どつて進む越
 後少將忠輝伊達中納言政宗其元帥みて水野
 日向守勝成先鋒より前將軍勝成と召びて曰
 ふ大和口の先鋒へ汝ふ非ざり可のありと
 思ふあり汝大和の將士と率あり命と用ぬぞ

良苑

るりの何うつバ先づ斬つて後我小聞せよ直孝高
 虎と謀り互の策畧小應ト其全勝と得ると目
 途とる一慎んで自ら槍と取り敵軍小駆け入
 り奮戦せ一故態と作すこと勿れと勝成感謝
 して出で軍小臨む井伊掃部頭直孝藤堂和泉
 守高虎近江伊勢の軍勢と引率して中軍の先
 鋒とり神原遠江守康勝松平周防守康重小笠原
 信濃守仙石越前守諏訪因幡守保科弾正忠丹

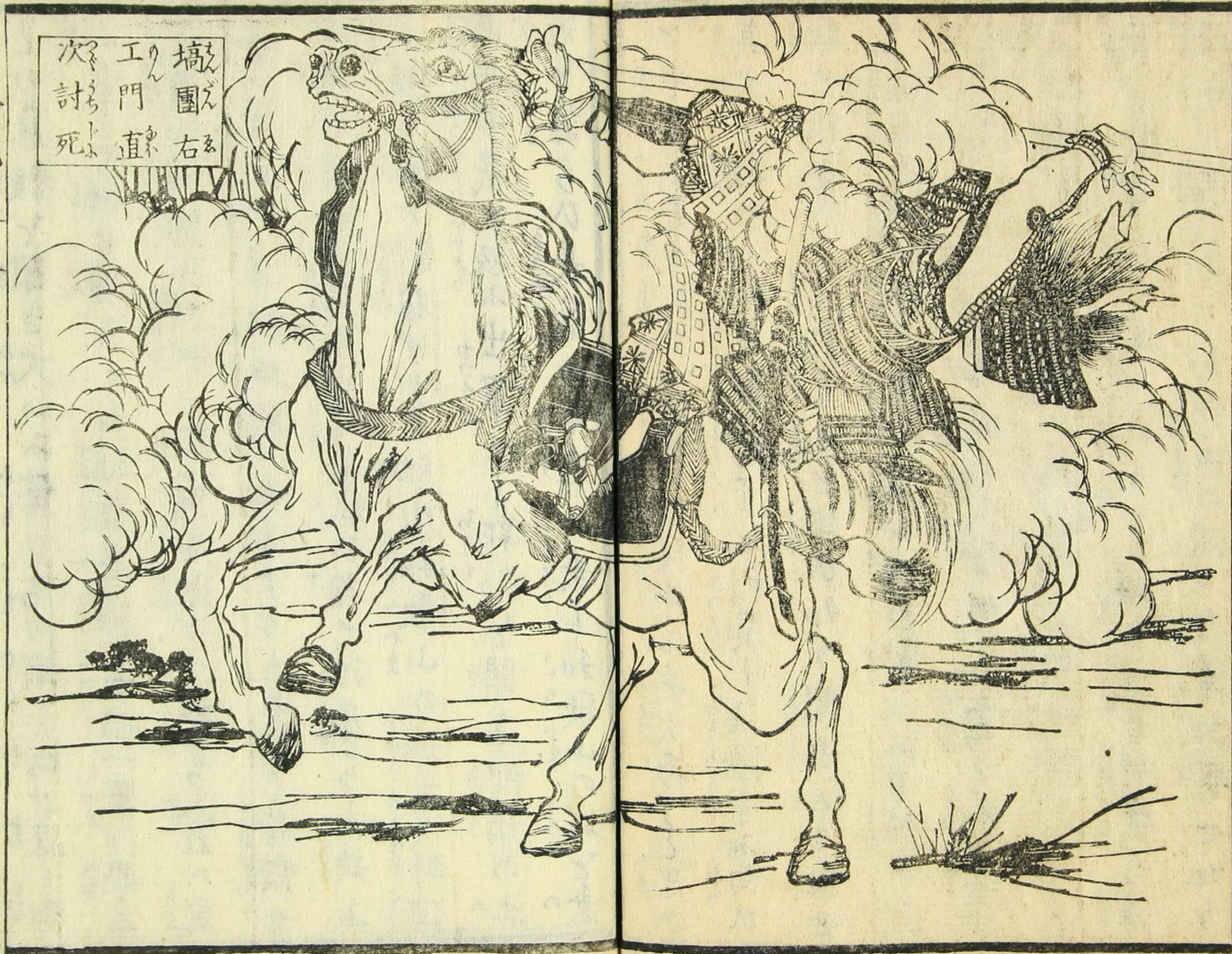
羽左京大夫ら之小継き河内口より進んどり是時小
 當り大坂の城将らへ兩將軍の京都小着ありしと
 知りいふも一して撃ち取らん小密小間者と遣
 へ一付け狙へせ一が終小其事と成すこと能はず
 茲小於て東軍の来らざる小先ぞち泉州堺と焼拂ひ
 足ごまりと妨げんと大野道見小兵若干と授け堺の
 浦々と盡く焼拂ふ又大和國法隆寺小在る中井主
 水正次へ容年の役小東軍の味方とる一城と攻るの

器械を造り櫓と打ち毀せしり其返報として主
水が居宅と攻め主水とたつめ家族らと撃ち取ら
せ虚小乗ト大和と侵さんと大野治房を將として
塙直次岡部則綱谷輪重政ら一万余人を率
ゐ法隆寺に至りたり中井主水正次へ大坂の兵押寄
まると聞くより早く家族と伴ひ遁れ走りし跡
まれを治房ら大い怒り主水が居宅に火と縦ちけ
るみ折ふ風烈しく火焰天と衝きければ郡山の城

と守る筒井主殿助定慶へ法隆寺に失火ありと思ひ
其火と救へんと手勢若干と引具へ法隆寺に向ひ
馳せ往きとり治房ら之と偵ひ知り問道より馳せ
て郡山の城に迫り短兵急攻め撃つふぞ城に残
りし者どもは思ひぬ敵の攻寄せしに驚き城を棄て
遁れ走りしり治房ら城に火をかけ手始めよりと
勇と歡喜早く軍と返ししり時筒井定慶へ法
隆寺に近づきしり郡山の城に敵軍押寄せたり

長元元年十一月

上



次	工	城
討	門	園
死	直	右

この急報と聞き大いふ驚き馬の頭を向け直一郡
山さして馳せ歸りし不埒團右工門直次一軍と率
定慶が帰路不埋伏し不意不起つて撃ち入れば定
慶の兵士周章狼狽戦はんとするりのなく皆散々
不逃げ走れり直次ハ之と追ひ捨て治房らと共
手軽く兵と引揚げしが紀州和歌山の城主浅野但
馬守長晟大坂不出軍せし報知と聞き紀州の土
寇と語らひ長晟の不在不乗と和歌山の城と乗

り取らせんと兵と拳させたり此時東軍大和口の先
鋒水野日向守勝成既ふ和州長池ふ進と来り郡山
まゝ法隆寺の慶と聞きおの部下不謂つて曰ふ敵
若し南都と焚らば我が耻辱なり疾く馳せ往らん
とてゆくとみゆんで南都ふ赴きけしむ治房ら勝成
の軍至ると見て兵と返し道と轉じて紀州路ふ入
りたり勝成治房らと追ひて法隆寺不至るふ浅野
長晟五千の兵士と引率し和泉ふ赴らんときるふ

良花史目録下

出會ぬ時いであひふ紀伊しきいの土寇のぶこども蜂起はちうきしく城下じやうげふ迫ら
 んとするの急報きんぱうありければ長晟ながあきの勝成かつせいふ分れ
 軍いんと返かへし其領地そのりやうぢふ入らんとする然治房ぜんぢぶらうら二万人にまん
 の兵へいと以もつて其後そのちろより撃手うごんと追おふ長晟ながあきの將
 龜田大隅高綱かめだおほすみたかたけ曰いふ平地ひらちの戦いくさひの寡兵せうへい方かた必ず敗
 せん宜よろしく軍いんと退あひけて榎井えのいふ至いたり林はやしふ據より蹊せきと
 塞ふさぎ陣ぢんを張ひるべしと長晟ながあき是議こゝろふ從したがひ榎井えのいふ退
 きて敵てきを待まちちとり翌あしたれば四月廿七日しがつにじちちつの黎明よあけ明治

房ふさの先鋒せんぱう塙團右衛門直次はたごんちくじ岡部大學おかくべだいがく則綱すなは谷輪六
 郎らう兵衛重政べいゑしげまさら五千餘人よみゆじんと率ひきゐて進すすむ來きたる龜田
 大隅おほすみ之これと見みて銃手てうしゆと前隊ぜんたいふ備そなへ小銃せうしゆと発たつこと
 雨あめの如ごとく團だん右工門みぎくもん大學だいがくら士卒しそつと指揮しきし同おなトく銃
 と撃うちりけり煙けむりの中なかより龜田かめだが軍いんへ衝つき來きたる
 猛勢まうせいとみまるとくくして龜田かめだの前隊ぜんたい少すこしく浮足うきあしど
 ちと見えければ塙團右衛門はたごんべいもん岡部大學おかくべだいがくら得えたり
 と踏込ふみこと突つき來きたり馬乗廻うまのりまわし兵へいと指揮しきして縦横じゆうけいふ

驅け惱ませし亀田が一軍捲り立られ崩れ走る團右
 衛門勝み乗ト自ら真先み進を来より二陣み扣へ
 一浅野家の將上田主水重安團右工門と討取らん
 と馬と進め槍と捻つて直次み突いてかゝる直次心
 得とりと槍執り直し渡り合ふ双方聞ゆる剛の者
 火花を散りて戦ふより直次いらつて突き出す槍
 と受け損ト重安へ肩先と刺れ直次も亦重安の槍
 みて股と貫れたとも兩名知るまは朱み成つて戦

ひしが軍卒の為みかけ隔てられ物ごりれとるりた
 り之をえて浅野家の士多胡助左工門るるりの再と
 直次と撃ち取らんと銃を取り狙ひと固めて発せ
 一弾丸あやまらず直次が鎧の引合せの間より肋骨
 と打ち碎きしるる驍勇絶倫の團右工門直次も血
 煙りと共み馬よりどろりと落ち櫻井の露と消え
 けを浅野の軍卒機み乗ト塙が備と突撃する
 す大将討とせし事なれば残兵らへず乱れ走

源平物語 卷六下

るを勢ひ小乗ト追ひ撃つと岡部大學谷輪
重政ら少く備へと退け塙が戦鬪の状と窺ひ
一が斯と見るより馬のりすめ直次が吊ひ合戦
みさんずと返り来る勢ひ尤も猛烈なれを亀
田高綱士卒小下知し銃手の巢口と揃えて撃ち
出す劇しき銃丸を物とせず斬り破らんと乗り
込と来る則綱重政の両将と我討留んと担ひ奔
てつ終つぬおの銃丸を撃ちとれ則綱重政も其處に

命を殞せしむる三将の軍卒ら敵一がとくして道と
争ひ敗れ走れり此時大野治房の泉州貝塚に陣し
塙岡部らより後援を促すと屢々なる兵を進め
ず終つぬ塙岡部谷輪の三将が戦死せし凶報を聞き
直次則綱らとる我今小違ひ敵地小深入りて斯
る大敗を引出せりと罵りて軍を返り大坂城
内小退きとる借り浅野但馬守長晟の直次ら三
将と撃ち取り軍と分つて本國の土寇を撃ちとせ

浪花抄卷之六



水野の勝
成野の陣
嶺の取
嶺の陣

浪花抄卷之六

長晟の直ち兵を進めて大坂に向ひたり紀州の
土寇ら大坂の軍大いに敗れしと云き為合の勢な
れば皆散々不落行て忽ち鎮定たりたりけり

○東西の先鋒大和口開戦の夏

既にして水野日向守勝成の大坂を撃ち入らんと其
部下の兵と二手分ち堀丹後守直寄松倉豊後
守重正と左右の隊將と為せり然るに重正直寄を
どしぬき先登と為さんと我隊下の兵と率めて潜

前路に進む直寄之を云き大いに怒り土地の人民と
召びて大坂への捷路を問ひけるに亀背嶺を越え
るに路最も捷し然れども昔時物部守屋此路を由
つる軍を進め敗走しとるが故に武人相傳へて以て
凶とするす也と答ふ直寄聞て軍の勝敗に何んぞ進
路の吉凶ふらうらんやと遂に亀背嶺を踰え重正
に先どつて國分嶺に至る此時水野勝成もまた部
下の総軍と率めて至り越後少將忠輝は猶南都

宿陣ありたり 借も西將軍の諸國より陸續集り来
 る軍勢漸く馳せ付けしを諸軍と率お京師と
 進發あらんと行軍の令と下す時大坂の細作京
 師入り禁内及び二條の城を焚うんとして事發覺
 板倉勝重属吏ふ命トて是を召捕り獄舎ふ下ど
 せり是故を以て暫時進發を停められ五月五日
 爽前將軍家康公京師を發し諸軍ふ命令と下し
 て三日間の糧食と齋すべしとるり且塩酒醬の類

僅一ト櫃みて事足れりとして自ら之と従へ肩輿
 不駕りて途小進む將軍秀忠公も同時伏見を
 出馬あり上叔中納言景勝留つて京師と守り男
 山小陣と取る前田少將利光越前少將忠直以下
 皆軍隊と率めて従ひとり此日前將軍の星田小宿
 一將軍の角南小宿陣ありたり去る程大坂の城
 將の東軍の先鋒大和河内の二道より進と大兵引
 續いて京師伏見より大坂小向ふの報知乍候兵の

早打ち頻りなれば諸隊長ら前日の軍議より
 東軍と大坂城外の南の方ふ迎え撃つんと欲せし
 後藤基次可りずして曰ふ野戦の勝敗の兵衆き
 りの必ず勝の論むるまでもら然らば今寡兵を
 以て衆兵と戦ふ所の險要の地ふ因りて邀え撃つふ
 去らざるなり臣請ふ一万の兵を以て國分嶺を取
 り切り関東の先鋒兵と撃ち挫らん先鋒敗れ
 ば後軍の必ず退きて南都若しくは郡山の此方へ

輒く軍と進むと能はざらん味方其機ふ臨を變ふ應
 じて勝軍の謀畧とみさん大軍と曠原ふ引受けて戦はん
 との臣が知らざる所なりと秀頼及び諸將ら此議ふ同
 一基次ふ兵一万四千人と授く基次直ち兵と率ゐる
 平野ふ出陣す秀頼まゝと薄田隼人正兼相渡邊内藏助
 尚ふ兵若干と授け基次ふ継ぎ出軍せしむ時ふ兩將軍
 潜ふ或人と基次の許ふ遣ひ我方ふ降伏するて東軍
 と導き城兵と撃つと播磨國と與へんと言せしむる基

次拜謝して曰ふ今東西の兵戦ひと決せんとなす西軍強く
 して東軍弱ければ則東軍ふ心と帰せん然るも東強く
 しく西弱く弱と去て強ふ就く臣が耻とする所な
 り然りと雖も関東の首の辱るも亦報答とるさずん
 ばあるべうは是ふ報ずるふの速ふ死するを以てせん臣
 速ふ死るべ城も亦速ふ陥らんと五月五日基次兵と勅
 一夜ふ紛れ國分嶺と取り切らんと馳せ行けるふ道
 と失ひたうらざ古市ふ出でけまは部下の軍士恟懼て

軍と返さんとす基次曰ふ此地の樹木森々として川ふ
 臨めば出で戦ふふも退いて守るふも便宜馬ふ水りひ
 兵糧と遣ひ天明を待つべしと翌六日の曉大野修理亮治
 長一軍と引卒し基次を助けんと出軍し真田左工門佐
 幸村の道明寺ふ出で木村長門守重成の若江ふ出で
 長曾我部右工門太郎盛親へ矢尾ふ出軍したり是時
 又兵衛基次の猶も國分嶺の要地を占め東軍ふ一泡
 吹かせんと後軍へも告げず曉を冒して前路ふ兵を

進めたり又關東の先鋒水野日向守勝成へ兵と率ひく
 既ふ國分嶺の頂上ふ在り基次が兵の炬火の光りと望
 と諸將を謂つて曰ふ炬火の北より来るもの道明寺に至
 つて滅えたり是敵軍味方の不意に出下撃ち入らん
 と欲まるありと嚴み備へと固めて敵の襲ひ來ると
 疾ち使と馳せて中軍の先鋒井伊直孝藤堂高虎ふ此
 状と告ぐ直孝高虎これとゆき直ち中軍を赴き兩
 將軍を謁し其状と陳へて指揮と乞けを乞ふ前將軍曰ふ

事我が意の如くありとて翌六日昧爽兩將軍兵を進
 め平岡に至りたり斯て水野勝成の敵軍と沮めんと
 堀直寄松倉重正らとて道明寺を赴りしむ重正直
 寄ら片山に至りてさく基次が前軍の兵を行遇ひた
 れば兩軍少くも猶豫せず銃砲と撃ち出すがゆる早り
 との壯士輩ら我もくと先と争ひ槍と合せ太刀と揮ひ
 おめきさげんで戦ふと後藤基次へ我が軍畧齟齬敵
 み嶺と踰えられたると憤り關東の弱兵づら蹴散らして

良史史目録下

一六

通らんとらと士卒しそを励むまゝ指揮しきされば勇将ゆうじやうの下した弱卒じやくそ
 後藤ごとうが一軍いちぐん奮激ふんげき一陣いちじん進すすまゝ松倉まつくら勢せを捲ま
 り立たつと堀ほり直寄ちよく之を見みて急きんに軍隊ぐんたいの方向くわうかうと轉てん
 後藤ごとう勢せの横よこより撃うつてかゝる基次もとつぐも亦また備そなへ立た
 て直ち堀ほりの軍ぐんと渡わたり合あふ此この機きに乗のりて松倉まつくら重正しげまさ部ぶ
 下の敗兵さいへいを止とめ又また盛返さかりて後藤ごとうが軍ぐんを撃うつて入い
 り追おひつ追おひれつ去さらる挑いどと合あひたり一いが名なみ
 一いち後藤ごとう基次もとつぐが鋒先はもとするごとく松倉まつくら堀ほりの兩軍りゅうぐん

ひや浮足うきあたちと基次もとつぐ馬上ばじやうに麾さを揮とりスハ敵軍てきぐんの
 乱ごれたり突つき崩くづして嶺とどみ至いたり水野みづの勢せと撃うち敗やぶ
 れとたげし下知げちみ隊下たいげの兵へい一層いちじやう奮激ふんげき突戦とつせん堀ほり
 松倉まつくらが兩軍りゅうぐんの遂つひに敗やぶれんとする時とき水野みづの勝成かつせい部下ぶか
 の諸隊しよたいと進すすめ無二無三むにむさん後藤ごとうの軍勢ぐんせへ衝ついて入いる
 新あ手の兵へいみ捲まり立たられさし由よしの後藤ごとう基次もとつぐも戦いくさひ
 疲つかれあこや敗軍さいぐんとみえざる折薄せはく田た兼相かねさう渡邊わたべ尚なほら
 基次もとつぐも継つぐんと此所このところへ進すすを来きりかくとんるより

良花

十一

兼相尚各軍隊と左右より進め水野勝成が軍と撃
 つ勝成味方の軍士曰ふ敵援軍の力と得とりとも
 素より馬合の兵卒づゝ何程の事あらん大和口手
 始めの戦ひも後れと取らば先鋒の命と蒙りたる
 我が一軍何面目ありて両將軍見へんや後藤らの
 三將と撃手取り敵軍と敗らぶんを勝成死すとも
 退りドと思ひ切とる指揮と聞き兵士ら弥々猛威
 と奮ひ撃手とる味方と踏こえく戦へども基次兼

相尚の三軍まゝと善く戦ひ東西の軍士入りとどれ
 互ひみ一步も退らざればこの場の戦闘いつ果つべ
 とも見えざり関東方大和口の搦督越後少将忠
 輝伊達政宗の両將ハ遙後陣在り一が前軍の戦
 ひ時と移し勝敗を決せざる急報あれば本多美濃
 守忠政松平下総守忠明遠山久兵衛尉らと先
 て陸奥美濃伊勢の諸軍勢と勝成が援兵不繰り
 出し忠輝政宗の両督將もついて出馬為し大兵と

良史史見下

十八

三面より進め基次らの軍と追つ取り囲む小銃と
撃ち發つこと夥し茲ふおいて後藤薄田渡邊の軍
勢撃ちあつちまされ少しく引色ふるると見るより
本多忠政松平忠明伊達家の将片倉小十郎景綱ら
おのゝ一軍と驅り立て大坂の軍へ衝いて入る既ふ
いづく水野勝成の味方の大兵援け来り敵軍や崩れ
なんといけれれば大いふ戦かと増し遂ふ渡邊尚が
一軍と突敗りたり大將内藏助尚踏と止まり備へを

立直さんととされども先刻よりの戦ひふ兵疲れ殊ふ
関東方の新参の大軍追々加はりけるふぞ此處にて防
戦せんといひがと見切り軍とまとめて引退く
畢竟後藤薄田らの勝敗いづららん第七輯の初ふ
説くべし

繪本難波戦記三編卷之二終

一
一

一

明治十四年八月廿三日 御届
同年九月十五日 出版

編輯人

東京府士族

和田定節

下谷區坂本町一丁目
十四番地

同府平民

書肆

出版人

武田傳右衛門

京橋區彌左工門町
十三番地

010190509341

